



現状と課題

- ◆基礎的な計算処理の定着が完全ではなく、繰り上がり・繰り下がり・小数点の移動・分数の変換でつまずきが散見される。新単元の学習の際は、既習事項の確認を繰り返すことで、複雑な計算にも対応できるようになる。
- ◆算数的な言い回しのある文章問題では、内容理解や立式に時間を要する。
- ◆生活体験の不足もあり、空間概念や量の概念が形成しきれていない。単位の変換や複合図形の計算は、多くの児童が苦手としている。

達成目標

- ◇基礎計算力を定着させ、計算前の見通しから計算後の確認まで確実にできるようにする。
- ◇問題文を正しく読み取り、それを基にした立式と、根拠の説明ができるようにする。
- ◇量や単位概念を有し、日常事象や教科書水準の内容を、正確に想像できるようにする。
- ◇算数的活動の楽しさや数理的な処理のよさに気づき、進んで活用する態度を育成する。



取組の重点

低学年

- 日常生活や学校生活の中で数や長さ、量などの見当をつける場を設定し、算数ブロックや具体物を操作する活動を通して量的感覚を育てる。
- 授業で対話的な活動を増やし、自分の考えを話したり、友達の考えを聞いたりすることで、自分なりに考える力を高める。
- ICTを用いたドリルを活用し、習熟する時間を設け、基礎基本の技能を身に付けさせる。

中学年

- 児童の生活に即した具体物や半具体物を効果的に使って考える活動を取り入れ、数量感覚を養う。
- 課題に対し見通しを持たせるとともに、既習事項を活用した自力解決の時間を確保する。
- 自分の意見の理由を明確にすることで、互いの考えの根拠や理由に着目させ、考える力を高める。
- ICTを用いたドリルを活用し、習熟する時間を設け、基礎基本の技能を身に付けさせる。

高学年

- 児童の生活に即した具体物や半具体物を効果的に使って考える活動を取り入れ、数量感覚を養う。
- 課題解決の見通しを持たせるために、導入で既習事項を振り返り、本時の学習につなげる。
- 自力解決で用いる図、数直線、言葉などを「式」と結びつけるために、目的に合った表現方法を用いて考えを整理したり、児童同士で話し合ったりする時間を設け、考える力を高める。
- ICTを用いたドリルを活用し、習熟する時間を設け、基礎基本の技能を身に付けさせる。

学習の流れ

3 少人数・全体学習
⇒共有化

1 課題把握⇒焦点化
(青囲み)

2 自力解決⇒個別化

4 まとめ⇒課題に
正対 (赤囲み)

5 ふりかえり
⇒定着化

- ・本日の授業のねらいはなにか。・どんな手立て、効果があったか。
- ・その結果何ができるようになったか、子ども達は自覚できたか。

個別最適な学び

- ・少人数、習熟度別指導、算数教室
- ・学習ドリルで個の習熟段階に応じた課題
- ・学習履歴を元に一人一人の課題、学習方針

協働的な学び

- ・共通の課題に取り組んで教え合い、学び合い
- ・場の設定、ICT等道具の工夫

学年での取組状況チェック

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 |
|-----|----|----|----|----|----|----|
| 2学期 | | | | | | |
| 3学期 | | | | | | |

3月：年間指導計画への位置づけ

4,5月：県及び全国学力・学習状況調査の実施

9月：上記調査結果の分析、新たな学力向上プラン策定